国　　語

第１　高等学校教科担当教員の意見・評価

１　前　　文

平成15年度から実施の高等学校学習指導要領を受け、平成18年度に試験科目が『国語』に一本化され、本年度は『国語』として８回目の試験である。

高等学校学習指導要領では、必履修科目は「国語表現Ⅰ」及び「国語総合」の２科目とされ、生徒はそのいずれかを選択することとなっている。「国語表現Ⅰ」は適切に話したり書いたりする力など、現代の社会生活に生かすことのできる言語能力の育成を重視している。「国語総合」は「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」及び［言語事項］の３領域１事項から内容を構成し、古典と近代以降の文章を含む総合的な科目である。標準単位数は「国語表現Ⅰ」が２単位、「国語総合」が４単位である。

高等学校「国語」教科担当としての立場から、本年度の試験問題を検討した。検討を加える視点として次の６点を設定した。

⑴　高等学校学習指導要領の目標・内容等に沿った問題（素材文・設問）であったか。

⑵　高等学校における授業や学習活動の実態に配慮がなされた問題であったか。

⑶　受験者の基礎的・基本的な国語力を幅広く総合的に判定し得る問題であったか。

⑷　素材文は「国語表現Ⅰ」「国語総合」の教科書で扱われる程度のものであり、高校生が読むのにふさわしく、魅力的なものであったか。

⑸　設問は、内容・形式・選択肢などによく検討が加えられ、受験者の読解・思考過程を想定するなどの配慮がなされていたか。

⑹　本試験との間で、問題の適否及び難易に関して不適切な較差はなかったか。

以上の視点に立ち、「試験問題の内容・範囲等」「試験問題の分量・程度等」「試験問題の表現・形式等」の面から、第１問～第４問までそれぞれに検討を加えて、評価し意見を述べる。

２　試験問題の内容・範囲等

第１問　西谷修「理性の探求」からの出題である。星空を眺める人間の夢想的な宇宙との対し方から語り起こし、〈見る〉ということの不思議さを段階的に解き明かした後、〈見る〉ことの叶わぬ人間が時間の痕跡を触知しようと星空に向かうロマンを語り添えている。論の骨子は〈見る〉ということの背後に潜む人間の意識のあり方を解明していくところにあるが、それを包む前後の部分も含め本文全体としての気品ある語りかけに誘われるような文章である。本文に独特な魅力がある点では本試験と共通しているが、現代の評論でもあり本試験の本文に比べ読みやすいものであった。本文は、約4,800字である。

問１　すべて常用漢字からの出題である。本試験とは異なり訓読みの漢字を問うものもあった。

問２　導入部分を読み終え本論に入ったところで、〈見る〉ということに対する筆者の疑念の内容を読み取らせる設問である。傍線部の続きに「われわれはこの茫漠たる広がりを、それだけの空間だと思って眺めている。けれども、」とあり、人間の意識と宇宙の広がりの実際とのずれをまとめた選択肢を選べばよいことがわかる。最初の読解問題として適切であり、空行の前の部分の理解が問われないことで全文の構成を考える手がかりにもなっている。

問３　現前する〈過去〉すなわち〈記憶〉を〈見る〉人間の意識とはどのようなものかを述べている部分について、その内容を読み取らせる設問である。傍線部の続きに「宇宙そのものの内的な意識」とあり、また「宇宙自体は何も想起しない。～けれどもそこに反照する意識が登場すると、」と述べられているのを踏まえると、正答が選べる。〈見る〉ということの不思議さの解明のさらなる深まりを理解することとなり、適切な設問である。

問４　〈見る〉という表現に違和感を抱く段階まで論が進んだところで、人間が〈見て〉いる宇宙とは時間の痕跡であることを確認している部分について、その内容を読み取らせる設問である。傍線部の直後に「なぜなら、そこに作用しているのは〈時間〉」とあり、また、傍線部の前述部分に「「視野が開ける」ということは、このシェルターの内だけを領界として」とあるのを踏まえると、正答が選べる。

問５　〈見る〉ということの不思議さを解明した後に、〈見る〉ことのできない時間の痕跡を〈見よう〉とする人間の意識の限界へと言及している部分について、「触知」という表現に込められた意味を読み取らせる設問である。傍線部の前の「痕跡をたどる」や「手探り」、また、傍線部の後の「時間の痕跡の収集」などを踏まえると、正答が選べる。最後の部分の理解に繋がる適切な設問である。

問６　(i)　本試験のような文体としての特徴ではなく、内容としてのキーワードの表記の特徴であり、選択肢①の正しさがわかりやすく、また、他の選択肢の末尾の説明の誤りも指摘しやすく、本試験に比べ易しい。

(ii)　第一の部分が導入である点はわかりやすいが、最後の部分を発展的に捉えるか、本論として前の二つの部分と連動していると捉えるかを見極めるのがやや難しい。第一の部分と呼応する夢想的な面や、第二第三の部分の結論を出発点としている面を考え合わせると、正答に至る。本文の特色を踏まえた全文理解の設問となっており、適切である。

第２問　福永武彦（ふくながたけひこ）の小説「鏡の中の少女」からの出題である。自己を対象に没入させ一体化することを求めて絵を描いてきた主人公麻里の、鏡に映る自分と対話しながら自画像を描いている一夜の心の動きが、麻里自身の内省も挿入しつつ全体としては客観的に語られていく。本試験とは異なり、小説の一場面を本文としており、リード文や冒頭部分から主人公の人物像を早い段階で捉えやすく、全体像がつかみやすい。本文は、約4,900字である。

問１　いずれの設問も辞書的な意味を問う基本的な語彙問題である。

問２　冒頭部分において、麻里にとって絵を描くということはどういうことかが述べられており、その内容を読み取らせる設問である。傍線部の直前部分に「見られた物たちと自分との間に、その時、距離というものはなくなり、世界は一つに収縮し」、また「彼女の捉えたものが実体となる」とあり、傍線部の後には「物は～捉えられそうになると逃げる」とあり、

これらを踏まえると正答が選べる。

問３　鏡の中の自分と対置し現実の自分を没入させていくうちに現実の自分の存在が希薄になっていく様を述べている部分について、麻里の実感としての傍線部の理解を問う設問である。

第一の部分の内容や19行目の「鏡の中だけで彼女は生きている。鏡の中の少女こそは実在なのだ。」とあるのを踏まえると、正答が選べる。基本的な設問である。

問４　第三の部分において麻里の思い出の蘇りの形で現実の自分の抱える恋愛感情が語られた後、それを「見えなくした」原因を内省する部分について、その内容の理解を問う設問である。「あたしの中にすんでいる物たち」という表現が比喩的で難しいが、第一の部分からの繋がりで考えると、対象への没入である芸術への傾倒が現実を希薄にしていることが読み取れ、正答が選べる。

問５　鏡の中の自分との対話を通して、麻里が自らの芸術への執心を否定的に捉えていく第四の部分について、その心情を読み取らせる設問である。鏡の中の少女とは現実の自分を没入させ一体化する対象であるから、それを「嫌う」とはそのような芸術への傾倒に対して抗おうとする心情を表すと解釈でき、正答へ至る。ここまでの本文に描かれた主人公の心の動きを総括することとなり、適切な設問である。

問６　最後の部分まで読み進むと、「あたしは眠らないのだ。」という内省がやがて「彼女は見る。」と客観的視点になり、そして再び「あたしはもっと別の物を見るだろう。」となるように、リード文にもあった「芸術上の悩み」に向き合う麻里という人物像が再確認される。選択肢②の「孤独から逃れようとして空想にふける」、④の「全体として幻想的な世界」、⑤の「内面の混乱を冷静に受けとめようとしている」、⑥の「二人の相似的な芸術観を示している」がいずれも誤りであることは指摘しやすい。本試験の小説世界が構造的につかみ難かったのに比べると易しいが、描かれていく視点に留意するなど、小説の読解において大切な内容が問われており適切な設問である。

第３問　江戸時代の建部綾足（たけべあやたり）の随筆『折々草』からの出題である。自己の体面を守るために弟子の命を奪おうとした剣術の師匠の心が、弟子の説得によって変化する過程が、長めの会話文を用いながら描かれている。本試験と比べて人物関係はつかみやすい。高校の授業では扱わないような文章ではあるが、追・再試験においてこのような文章を取り上げることで、多様なジャンルの古典作品に触れるきっかけになるという点で評価したい。難易度は本試験より若干易しい。本文は、約1,800字である。

問１　語句の解釈を問う設問である。㋒の「わくらばに」は難しいが、「子なければ」が確定条件を表すということさえわかっていれば正答を選べる。いずれの設問も、本試験の問１に比べると易しい。

問２　助動詞の文法知識を中心とした識別問題であったが、紛らわしい選択肢がなく、容易に正答が選べる。

問３　傍線部の弟子の行動から心情を推測させる設問である。設問自体は適切であるが、選択肢の文章に工夫がほしい。直前の表現の「あなり」に注意できれば②③以外は即座に排除でき、傍線部の「やをら」によって正答できる。文脈把握よりも文法知識・単語の意味への依

存度が高くなっている。

問４　傍線部の師匠の発言の意図を問う設問である。（注）の表現にも注意しながら、傍線部以後の「～頭をたれて我に給はらんや」までの長めの師匠の会話文を正確に理解しなければ正答できない。選択肢の表現も含めて適切な出題であった。

問５　弟子が師匠の心を変化させた理由を問う設問である。師匠の心の変化の要因は、直前の弟子の会話文の内容である。「今事にあたればこそ命はいと軽しと申せ、～よく聞こしたうべよ」までの長い会話文に加えて、選択肢の文章も３行にわたっており、本文と選択肢の文章の慎重な吟味が必要であった。ただし、根拠となるべき範囲がはっきりしているため、本試験の問５に比べると易しい。

問６　本試験の問６と同様、表現の特徴と関連させて全文を捉え直す設問である。選択肢の文章も３行にわたっているが、表現と内容について、本文に書かれていない部分を持つ選択肢を排除できれば、正答が選べる。適切な設問である。

第４問　明の文人、謝榛（しゃしん）の『四溟詩話（しめいしわ）』からの出題であり、謝榛が詩の作り方について友人たちと論じ合う話である。内容的には詩論に近いが、抽象度はさほど高くなく、高等学校の授業できちんと漢文の学習をしてきた受験者にとっては読み取りにくさは感じなかったと思われる。設問は、本試験と同様に８問に増加したが、難易度は本試験より若干易しい。総文字数は196字であり本試験とほぼ同じである。

問１　傍線部の漢字と同じ意味の熟語を選ぶという設問である。本試験と似た形ではあるが、選択肢の熟語をそのまま傍線部に当てはめ、正当を推測することが可能で、本試験の問１より易しい。

問２　李白と杜甫についての文学史の知識を問う設問である。高等学校で学習しておくべき基本的な内容であり、漢文の文学史の出題のされ方として適切であった。

問３　傍線部の解釈を問う設問である。「歴観」「法」の意味を前後の内容と照合させながら判断していけば正答が選べる。基本的な設問であるが、直後が問４との絡みで白文になっているので、問４と合わせての慎重な吟味が必要である。

問４　白文の訓読の仕方を、返り点の付け方と書き下し文の組み合わせで問う設問である。「当に～べし」の再読文字の知識と文脈把握によって、正答が選べる。基本的な設問である。

問５　筆者の詩に対する考えの土台となる部分の理解を問う設問である。「不必～」の部分否定の句法の知識と、直前の「得此三要」という条件に注意すれば、正答が選べる。適切な設問である。

問６　傍線部の解釈を問う設問である。「使役」「反語」の二つの句法が正確に理解できれば、正答が選べる。受験者の漢文学習の定着度を確認する意味で、適切な設問であるが、選択肢の表現にもう少し工夫がほしい。

問７　傍線部の主旨について問う設問である。「使役」の句法の知識を用いて傍線部を正確に現代語訳することに加えて、傍線部を条件として繋がっている直後の内容も含めて判断する必要があり、難しい。五行目の「造乎渾淪」の直後の傍線Ｄの内容と、傍線Ｆの直後の内容がほぼ同じであることがわかれば正答は選べる。設問の形式も工夫されており、良問である。

問８　文章の展開の仕方と内容を問う設問である。選択肢の文章が全て、三つの要素で作られているので、本文との照らし合わせは難しくない。展開上重要な内容を確認させることによって、これまでの内容を振り返ることにも繋がっている。適切な設問である。

３　試験問題の分量・程度等

⑴　分量について

追・再試験の本文の字数（漢文以外は文字数×行数）を本試験と比較すると次のようになる。

	本試験	追・再試験
第１問　評論	約4,400字	約4,800字
第２問　小説	約6,000字	約4,900字
第３問　古文	約1,400字	約1,900字
第４問　漢文	198字	196字

第２問　小説は、本試験に比べ追・再試験の方が分量も少なく、読みやすいものであったが、４問全体として見れば、バランスがとれていた。

⑵　設問数について

制限時間80分に対して、大問が４問、大問ごとの設問は、第１～第３問は各６問、第４問は８問であった。解答数は、本試験と同じく、37であった。

⑶　難易度について

第１問　評論、第２問小説ともに、本文の難しさのため本試験の方がやや難易度が高かった。第３問古文、第４問漢文についても、同様の傾向が見られ、全体としても、本試験に比べると追・再試験の難易度が低くなっている。今後の工夫を期待したい。

４　試験問題の表現・形式等

⑴　表現について

設問の表現では、本試験と同じく、「どういうことか」、「なぜか」、「～にとってどのような行為か」など設問の意図に応じて多様であるよう、工夫されていた。

⑵　配点について

第１～第４問までを各50点満点とする配点に変化はない。解答一つ当たりの配点も、内容に見合った配点であり、最高点は本試験と同じく８点で本試験との釣り合いもとれていた。

⑶　形式について

選択肢については、本試験と同様、６例から二つを選ぶものが１問、４例から一つを選ぶものが２問、残りは全て、５例から一つを選ぶものであった。

５　要　　約（意見・要望・提案等）

追・再試験の受験者はごく少数であり、入学者選抜全体に与える影響は小さい。しかし成績資料として本試験と同等の扱いを受ける以上、相互の難易較差は最小限にとどめなければならない。今年度の追・再試験は、文章自体の難易度や選択肢の練られ方において、全体的に易しくなったとい

う印象を受けた。センター試験が今後どのような方向に向かっていくのかを示唆する意味で追・再試験の果たす役割は大きい。本試験と併せたメッセージ性という点において、その影響の大きさに留意して、文章の素材及び設問のあり方についてはさらに慎重を期してもらいたい。

追・再試験の現代文は、冒険的な意思を感じさせる本試験と比較しても全く遜色のない魅力的な文章であった。学習指導要領の趣旨を踏まえた適切な出題であると評価する。古典分野では、特に古文において、こうした文章にも触れてほしいという出題者の意図が感じられたが、登場人物が少なかった上に、話の要となる会話がカギ括弧でくくられていたため、人物関係の把握でほとんど迷うことがなかった。本試験のような文章の深みが感じられなかった点は残念である。

本試験の情報が公開された上での１週間後の試験ということを考慮した時、追・再試験の方がやや難しくなることが望ましいと思われる。この追・再試験が、今後の高等学校「国語」の目指すべき指針を示してくれることを切望し、以下に意見・要望等を示す。

⑴　本年度の追・再試験の本文は高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえたものであり、特に評論と小説については、本試験に見られた（注）の煩雑さも解消され、高校生に内容をじっくり考えさせる良い素材文が選択されていた。ただし傍線部前後の情報処理で正答が決まってしまう設問の仕方や選択肢の作り方には再考の余地がある。古典に関しては第３問、第４問ともに話の展開を押さえやすい文章で、設問も標準的もしくは平易な内容であった。本試験との難易度のバランスをとるためには、設問をもう少し工夫をする必要があったと感じる。

⑵　第１問について、本文の長さ、抽象度などから、出題された文章は高校生が読む評論として適切であった。三次元の認識世界に時間軸を設定する展開は読みごたえがあり、文章の難しさの割に受験者は読解の楽しさも感じられたのではないか。傍線部近くの情報処理的な解法を拒む選択肢群には意図が感じられたが、その表現についてはもう少し工夫ができたのではないか。

⑶　第２問について、本試験を意識したと思われる「鏡」を用いた二重構造、すなわち現実世界と心的世界を読み取らせる内容で、受験者の読みの確かさを問う良問である。自己との対話という点で抽象度の高い文章ではあったが、リード文で状況がつかみやすくなっているため、本試験に比べて、受験者は安心感を持って読めたのではないか。選択肢の誤りが指摘しやすい面はあったものの、設問の狙いは明確で、比較的完成度の高い問題であった。

⑷　第３問について、従来の古文の出題傾向とは違ったユニークな出典であった。内容的には、文法に裏打ちされた設問が中心に据えられており、読解力の確かさがそのまま正答に結びつく点で受験者の努力が報われる問題だと言える。ただし、素材文の内容を引き出す設問のあり方や選択肢の表現についてはもう少し工夫ができたのではないだろうか。

⑸　第４問について、詩論の体裁をとっている随筆であるが、（注）を援用すれば内容把握もそれほど難しくない。使役・仮定・反語のように、多少難易度が高くても重要な句法の理解を求める設問は受験者にとって勉強の意義が感じられるものである。質問内容は本試験に比べて易しかった。